

事業2 5, 6年次_研究・臨床実習期間中の海外渡航支援

番号	氏名	渡航先	国・地域	渡航先での受入期間
1	K・M	香港中文大学	香港(中国)	2023/4/3～2023/4/21
2	Y・G	香港中文大学	香港(中国)	2023/4/3～2023/4/21

6 年次海外実習における活動報告書

2023/04/03-2023/04/21

於 The Chinese University of Hong Kong

大阪大学医学部医学科 6 年次 ***** K・M

1. 概要

実習期間：2023/04/03～2023/04/21

実習場所：Prince of Wales Hospital

診療科：産婦人科

スケジュール：

【入国後の大まかなスケジュール】

2023/04/02	日本出発 香港入国 Prince of Wales Hospital 到着
2023/04/02 ～2023/04/21	下記の通り
2023/04/22	香港出国 日本帰国

【1週間のスケジュール】

	午前(9:00～)	午後(13:00～)
Monday	Urodynamic study clinic	Urogynaecological clinic
Tuesday	Early pregnancy assessment	Mens clinic
Wednesday	Labour Ward	Labour Ward
Thursday	Antenatal clinic	Grand Rounds
Friday	NNU Rounds	Hysteroscopy

2. 活動内容と学習の成果

・外来見学

産科と婦人科の両方の部門を見学しました。患者と医師の会話は香港での公用語で

ある広東語でなされます。そのため、各患者の診察と問診が終わるごとに英語で先生

方に説明していただきました。大量の患者を捌く合間の時間はわずかであり、それに従って先生の説明もかなり早口だったので初めはかなり苦労しました。しかし毎日、聞き取れなかったフレーズと理解できなかった内容をメモに取り、復習することを3週間繰り返すことで、最終週にはカンファの内容についていくようになるなど、最初の週に比べてかなりの成長を感じました。

医学的な内容としては、妊娠糖尿病や多胎等のハイリスクな妊婦検診や、子宮内膜症や子宮脱など、産科と婦人科の両方の領域の知識を深めることができました。何しろ件数が多いので、多彩な胎児エコーや経腔エコーを十分に見学することができたことは特に貴重な体験でした。

・産場

産場では帝王切開と自然分娩を見学しました。帝王切開の適応などは世界的なガイドラインに沿っており、大まかな流れは日本と同じであると感じました。しかし、帝王切開の最後の皮膚の縫合の方法が日本と違って3~4針程度であった点や、経腔分娩での産道裂傷は第2度以上が大半であったりと、命に関わらない部分では大きな違いを感じました。また、病院の特性上ハイリスク妊婦が多いのもあってか、30代後半の妊婦による出産が目立つ印象でした。調べてみると香港は初産の中位数が31.6歳（香港的女性及男性—主要統計数字（2018年度版）より）であり、日本の30.9歳（国勢調査（2021

年) より) と比べても香港での出産年齢の高齢化を感じました。

・カンファレンス/抄読会

カンファレンスは週に 1 回木曜日の午後に行われており、主に 1 週間で起きた症例について検討していました。抄読会では日本同様、主にレジデントに相応する先生方が論文の紹介をする形でした。特に、帝王切開における子宮の縫合方法が 1 層縫合と 2 層縫合を比較し、1 層縫合の方が腹壁子宮内膜症などのリスクが少ないとしていた論文についての議論が印象に残っています。主流である 2 層縫合を実施している中で、若手の医師が教授や上級医の先生方に 1 層縫合を提案し、それに対しても様々な立場の先生方が各々の意見を忌憚なく話していく様を間近で見られてよかったです。英語には日本ほど明確な敬語表現がない中での熱い議論は大変興味深かったです。

3. 感想と今後の抱負

ここでは、香港の病院で過ごした中で、特に感じた日本との違いについて書きたいと思います。

まずはシステムの面です。香港には公立病院と私立病院の 2 種類の病院があり、今回お世話になった Prince of Wales Hospital は香港で最も大きい公立病院のひとつで、質の高さと費用の低さによりかなり需要が高く、日々多くの患者が訪れています。産

婦人科でも 1 日の外来患者が医師 1 人につき 30 人を超える日もありました。明確に公立病院と私立病院のシステムに分かれているせいか、患者の次回外来の予約は患者の予定を一切考慮せずに決めるなど、完全に効率を重視して膨大な数の患者を捌いており、その回転率は圧巻でした。私立病院と比べると接客性は劣るものの 10 分の 1 以下の費用なので、接客性を求めるなら私立病院へーというルートがあるためか、そういった効率化故の不便さへの不満は少なく感じました。一方それに付随してか、手術決定に際してのパターナリズムを感じる場面もありましたが、効率という点では明確に公立と私立で分かれていることの有用性を感じました。

2 つ目は、今回の実習で最も痛感した英語についてです。今回の実習にあたって IELTS の勉強と共に、産婦人科領域の医学英語を勉強していましたが、日常会話だけでなく医学英語を母国語の如く使う香港の先生方に付いていくのは大変でした。香港では、医学は英語で学ぶものであり、カルテをはじめカンファレンスも英語するのが普通です。各学年の半数以上は帰国子女やインターナショナルスクール出身であり、残りの人々も大学入学と同時に英語での学習を始めたにも関わらず、自在に英語を操っていました。大学入学後の彼らの努力を想像し自分と比較して、自らの不勉強を恥ずかしく思いました。一方で、母国語である日本語で医学を勉強できるということは偉大な先人達の努力の結晶であることを実感し、その恵まれた環境で医学を学べることへ有り難みも感じました。母国語で医療単語が存在していることで一般の人も

気軽に医学にアクセスできること、それは素晴らしいことだと思います。しかし自分自身はそれにあぐらをかかず、英語でも医学を学んでいきたいと思いました。

4. 最後に

この貴重な 3 週間を過ごすことに多大な援助をいただきました、岸本忠三先生をはじめ、熊ノ郷先生、渡部先生、河森先生、寺田先生、受け入れてくださった香港中文大学の先生方、そして尽力してくださった全ての方々に心より感謝申し上げます。

6年次選択海外実習における短期留学実習の活動報告書

2023/04/03 – 2023/04/21 於 香港中文大学医学部

大阪大学医学部医学科 6年次 ***** Y・G

概要

今回、4月3日から4月21日の19日間にわたって、岸本国際交流奨学金の援助のもとで、香港中文大学医学部放射線医学科、および威爾斯親王醫院(Prince of Wales Hospital)にて6年次選択海外実習をさせていただいた。

海外の医療現場を肌で体感するとともに、香港の医学生との文化交流もでき、いち医学生として大変貴重な体験となった。

実習内容

香港中文大学(Chinese University of Hong Kong)の放射線医学科(Department of Imaging and Interventional Radiology)に所属する諸先生方にお世話になった。

今回の実習内容を大まかに述べる。

1週目(4/3-4/6 4/7はイースターで祝日)

エコー検査/アンギオグラフィー/IVR治療を主に見学させていただいた。

2週目(4/11-14 4/10はイースターで祝日)

CT検査/読影/核医学検査を主に見学させていただいた。

3週目(4/17-21)

MRI検査/エコーを用いた治療を主に見学させていただいた。

大きな枠組みとして、放射線画像診断・IVR・その他に大別して書く。

1. 放射線画像診断

専攻医の先生(香港では研修医期間が1年で、その後3~4年かけて専門医を取得する。その間の期間を専攻医:residentと呼んでいた)が、診断レポートを書くのを横で見学させていただいた。全身のCT画像・MRIやPET-CT、SPECTなど様々な画像を読み込み、異常がないかチェックして放射線画像診断レポートを書くという点では日本の放射線画像診断と変わらないが、カル

テ記載は全て英語である。英単語を高速でタイピングしてらっしゃって、そのスピードにかなり驚いたのを覚えている。

もう一つ違う点は、それぞれの画像診断にテンプレート文章がカルテにデフォルトで入っていることである。

そのテンプレートをコピー&ペーストし、必要な部分以外を消したり書き換えたりしてレポート作成していた。日本の医師がこのようなタイプの電子カルテを使っているのは今までどの実習でも見たことがなく、興味深かった。確かにテンプレートの使用は、仕事としての印象はやや悪い感があるが、効率の面で日本の医療でも導入すべきだと思う。他の医師が見た時に個々でレポートの形式がバラバラなよりは、統一されている方が見やすいと思った。

2. IVR

IVR(Interventional Radiology)の治療光景も、何度も見学させていただいた。術前に入念に医師同士で議論して、どのような方針でカテーテルを挿入しどの血管に硬化剤を入れるか策定した後、IVR 医師 2 名と看護師 1 名、放射線技師 1 名で治療を行うことが多かった。IVR 室に一旦出て画像を撮っている最中、今どのような状況か丁寧に説明していただき、大変勉強になった。

3. その他の治療

Prince of Wales Hospital の放射線科では、放射線医学科の医師(多くの場合レジデント)が担当制で CT・MRI・マンモグラフィーの撮影を行っていた。また通常のエコーもかなりの件数行っていた。

面倒を見ていたくことが多かった先生(Dr. Yan)が超音波室の担当になっていることが多かったため、必然的に私も超音波検査を多く見学させていただいた。治療の内容は、最も多いのが腹水穿刺であった。先生方はかなり慣れた手つきで患者さんを診察し、画像下で穿刺し、腹水を抜くためのシリンドー付きのチューブにつながった針を穿刺していた。治療中、次の患者さんは基本的にナースステーション横でベッドカートの上で待たされており、看護師さんの計らいで、1人終わり次第どんどん運び込まれていた。午前中だけでも 10 人前後を 1 部屋でこなしておられた。公立病院で、業務量に対して人手が比較的に不足していることも関係しているとおっしゃっていた。

今回の海外実習の感想

香港では、公立病院と私立病院でのサービスの差がかなり大きいと聞いた。国民は基本的に全員公的保険に加入しており、公立病院では 100 香港ドル(約 1700 円)でほとんどの治療が受けられるそうだ。しかし、公立病院は医師の教育機関としての役割も担っているため、手技が上手

くなかったり、待ち時間が伸びたりすることは前提として許容されている。それが嫌なら私立病院へ、ということである。

また医師側についても、給料や働き方も全然違うと先生達はおっしゃっていた。公立病院で経験を積み専門医資格を取得したあとは、私立病院に移る人が多いという。

このようなはっきりとした役割分担については、日本の医療制度も見習う必要があるのではないかと思った。日本の病院はどのような病院でも暗黙の了解のように患者ファーストが求められ、公金で大部分が賄われているはずの医業がサービス業であるかのように扱われている現状がある。曖昧な態度は結局どちらの得にもならない事が多い。医療を受ける側の国民に理解が得られるような形で、病院の棲み分け、サービスの提供形態の分別がなされると、解決される日本の医療制度の問題点もあるように思う。

また、放射線医学診断科の教授である Dr. Ann King とお話しさせていただいた所感を述べる。他の東南アジアの国と同様にすべて英語で行われる香港の医学教育を、King 教授はどうやったらより良く出来るか常に考えておられた。特に放射線科はメジャーと呼ばれる科目ではない事もあり国家試験でも出題頻度が多くはないため、軽んじている学生もいるとのことであった。日本でもこの点については概ね同じだと思われる。しかし、師は放射線科という科目の学習は、臓器の解剖生理を「画像」の形でもう一度網羅的に学べるとてもいい機会だとおっしゃっていた。放射線治療の事よりも、CT スライスと親しむ事で全身の臓器の解剖を頭に叩き込んでほしいと仰っており、師が講義で使われるパワーポイントの資料を見せていただいたが(出来る事たら持ち帰りたかったが、版権の都合上できないと言わされた。残念である)、詳細な CT 画像がほとんど全ての臓器の解説に添付されており、網羅的に、かつ専門的な知識をなるべく排して解剖の理解を第一に作られている資料であることが分かった。CT スライスのみを配置してマウスのスクロールで本物の CT 画像ビューアのようにぐるぐると動かしてみられる資料には驚かされた。今回 King 教授とお話してきて、大変貴重ないい機会となった。

最後に

今回の大阪大学医学部・香港中文大学医学部の交換留学を行うにあたって、ご協力くださった Dr. Ann D. King、また Prince of Wales Hospital の先生方、香港の医学生たち、そして毎年当プログラムを岸本国際奨学金に採択してくださる岸本忠三先生ならびに関係者の皆様に、心から感謝申し上げます。